

第101回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 2015年1月30日(金) 15:00~17:00
2 場所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室
3 内容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

- ・小田桐 奈美 外国語学部助教

発表テーマ「ロシア語とどう向き合うか ―ソ連崩壊後の中央アジアの言語と社会―」

- ・尹 禮分 環境都市工学部教授

発表テーマ「都市社会の諸問題における知的情報処理法の活用について」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

- ① 2015年度入学試験 志願者状況について 資料1
② 大学院商学研究科データサイエンティスト育成プログラムについて 資料2
③ 大学教育再生加速プログラム採択記念シンポジウム
および交渉学ワークショップの開催について 資料3
④ シンポジウム「反転学習がディープ・アクティブラーニングを促すか？」
の開催について 資料4
⑤ エクステンション・リードセンター2015年度開講講座
および資格取得・講座受講の現状について 資料5
⑥ 文化財保存修復セミナーの開催について 資料6
⑦ 特別公開講座(大同生命保険株式会社寄付講座)の開催について 資料7
⑧ 第四回淀川大掃除の開催について 資料8
⑨ 関大生の活躍について 資料9

(3) 懇親会(17:00~)

4 大学側出席者

楠見晴重学長、西村枝美学長補佐、
小田桐奈美外国語学部助教、尹禮分環境都市工学部教授、
小泉良幸入試センター所長、福田聡入試広報グループ長、矢田勝俊商学部教授、
三浦真琴教育開発支援センター副センター長、森朋子教育推進部准教授、
宇恵勝也キャリアセンター所長、原徹キャリアセンター事務局次長、
荒堀善文エクステンション・リードセンター事務グループ長、
藤本清高総合企画室長、中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第437号、第438号
(2) 関西大学ニューズレター「Reed」第39号
(3) 行事予定表(2月~3月)

以上

【次回(第102回)記者懇談会開催予定】

日時: 2015年3月11日(水) 15:00~17:00

場所: 千里山キャンパス 関西大学会館 グランドフロア常任理事会議室

ロシア語とどう向き合うか

—ソ連崩壊後の中央アジアの言語と社会—

外国語学部助教 小田桐 奈美

【概要】

言語は、我々にとってあまりにも身近な存在であり、まるで空気の様だと例えられることも多いが、その役割を決して過小評価することはできない。実際、言語は日本を含む世界の様々な地域における国家建設の過程で大きな役割を果たしてきたし、個人にとって、言語がアイデンティティの拠りどころとなる場合や、特定の言語を習得することが社会的・経済的成功と直結する場合もある。

1991年のソ連崩壊以降の中央アジア諸国に目を向けてみると、新生国家としての国家建設の過程では、それぞれの基幹民族（国にその名を冠している民族）の言語が国民統合の象徴として位置付けられ、「国家語」として推進されてきた。その一方で、ソ連時代に広く普及したロシア語を、今後ポスト・ソヴィエト社会の中でどのように位置づけていくのが、最も重要な論点であり続けてきた。また、そこに暮らす人々も、自身の日々の生活の中でロシア語を実際にどのように使用していくのか、次世代にどの言語を託していくのか、答えの見えない選択に直面してきた。

本発表では、旧ソ連諸国の中でも特にロシア語を維持し続けている国の一つである、中央アジアのキルギス共和国を対象として取り上げ、まず言語政策におけるロシア語の位置付けを概観する。その上で、そこに生きる人々が、政府の方針、アイデンティティ、社会・経済的成功といった言語をめぐる様々な問題と自分なりに折り合いをつけながら、多言語状況をたくましく生きている状況を、発表者によるインタビュー調査の結果などに基づいて明らかにする。なお、本発表では必要に応じて他の中央アジア諸国の事例も紹介する予定である。

【プロフィール】

1984年青森県生まれ。関西大学外国語学部助教。キルギス共和国アラバエフ記念キルギス国立大学（交換留学）、日本学術振興会特別研究員（DC）を経て、2013年4月より現職。筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻一貫制博士課程修了、博士（言語学）。専門分野は社会言語学、中央アジア地域研究、ロシア語教育。主要著書に、『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」—国家建設期のキルギス共和国における言語と社会』（関西大学出版会、校正作業中）、「キルギス共和国の多言語実践にみる共生」岡本智周／田中統治編著『共生と希望の教育学』（筑波大学出版会、pp.295-305、2011年、分担執筆）がある。

都市社会の諸問題における知的情報処理法の活用について

環境都市工学部・尹 禮分 (ゆん いえぶん)

【概要】

我々の生活に密接に関係している社会基盤施設が、所定の機能や役割を果たすためには日常の維持管理が重要になる。そのために、定期的な点検に基づき、損傷とその程度を判断した上で必要な補修対策がとられるべきである。しかし、損傷程度の判定は点検技術者の主観に頼る部分があり、評価者（技術者）が変われば評価そのものが変わることもある。しかも報告されている損傷状況と、それに対する補修の対応に食い違いが生じる場合があり、点検結果による補修基準が曖昧である。社会的インフラシステムの維持管理による有効利用が求められる昨今にあって、既存の社会基盤施設の保守事業は急務であるが、これをより効率的に実施するため、一層高精度かつ客観性を有した点検評価手法の確立が不可欠である。これまで知識情報処理法（データマイニング技法）を用いた様々な研究に取り組んでおり、防災事業計画支援システム、構造物補修施工計画支援システム、危険度評価システム、点検業務に利用可能な評点式データシートに基づく健全性評価システムの開発を行っているが、本報告ではその中での一例を取り上げ、紹介する。

【プロフィール】

1971年韓国・釜山生まれ。関西大学環境都市工学部教授。1994年韓国・釜慶大学応用数学科卒業、1996年同大学院修士課程修了。同年大阪大学工学部研究生として入学、1997年同大学院博士課程に進学、2000年修了（博士（工学）取得）。その後、香川大学工学部助手、准教授を得て、2010年本学着任。来日以来、工学・社会システムで発生する諸問題を数理的にモデル化し、コンピュータを用いて問題解決するための意思決定支援システムの構築に関する研究を行っているが、防災・減災技術における数理的手法の利活用や計算知能手法を用いた社会基盤施設の維持管理手法開発にも取り組んでいる。著書は『多目的最適化と工学設計—しなやかシステム工学アプローチ』（現代図書・中山，岡部，荒川，尹共著）、『Sequential Approximate Multi-Objective Optimization using Computational Intelligence』（Springer・Nakayama, Yun, Yoon 共著）。